
私のGuardian

たにぼん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私のGuardian

【Nコード】

N4661S

【作者名】

たにぼん

【あらすじ】

主人公、晴香^{はるか}はある日の夜酔った勢いで守護者を封印していた呪文をといってしまった。その男の子は岬^{みさき}と名乗るが晴香以外の人間には見えない。晴香は岬に恋心を抱いていくのだが・・・。

1話（前書き）

中学生という分際での投稿ですがよかったら見てやってください。

1話

目覚めたとき私の目の前に居たのは
悪魔の格好をした男の子。

年齢は・・・私と同じ17歳ぐらいだろうか。
それとも年上なのか、はたまた年下なのか・・・。

ガーディアンとは、守護者。

私は何らかの方法でいつのまにかガーディアン守護者を召喚していたのだ。

8月の猛暑日。

その日の気温31℃だった。

暑すぎるにも程がある、と友人の浅田朝子あさだともことそんな話をしていた。

日焼けとかそういうのは嫌いで日焼け止めを塗っているが

この暑さと紫外線では日焼け止めの意味もないだろう・・・と思って
しまう

その日の夜、朝子と七島亜子^{ななしまあすか}佳と私で集まって
気分を紛らわすためにチューハイでも飲もう、という事になっ
た。

1話（後書き）

※お酒の飲酒は20歳を超えてからですので真似しないでください
ね（当たり前だけど）

2話

その日の夜。

約束どおり朝子と亜子佳と集まり

お酒を飲みながらワイワイと騒いでいた。

話も尽きたので解散という事になり、各自自分の部屋に戻っていった。

ちなみに、ウチの学校は寮があるが、家から登校したい者は家から寮がいい者は寮からというよくある仕組みになっている。

そして今は私が呪文をといってしまう数分前――。

「ツナハ・・・キトヲマク、アデ。ンモユジノコ」
なーんて、適当に言ってみたり。。。

すると目の前が一瞬光って
私の意識は急に途絶えた。

2話（後書き）

逆さになっているので（呪文は）右端から読むとわかりますよ W
呪文が単純すぎる W W W W W

3話

「悪魔なんてこの世にいたらどういうことになるのかなー・・・やっぱりのつとられて学校荒らされたりしてさー・・・」

「それはないとおもうよ」

「んー・・・そうなのかなー・・・って誰!?」

思いつきりベッドから身体からだを起こす

「いや、誰って言われてもさ・・・。」

「だから誰よ。あんた誰!・・・悪魔らしき格好して!どこから入ってきたのよ!変態!!!!勝手に女の子の部屋なんか入ってきて!!!!」

「変態じゃねーよ!お前が俺の封印解いたんだろうが!!しかも悪魔らしきって言うてるけどさ、悪魔だからな!?!」

なんなのよ・・・コイツ!

「封印解いたって何よ!しかも悪魔とかいるわけないじゃん!!!!」

「今ココにいるだろうがよ!!!!お前の目の前に!」

「いるけど・・・!そんなものは存在しないのよ!それともオカルト部にでも行ってみてお前は悪魔だって言わせてみる!?!」

「オカルト部?そんな奴らに見つかってたまるか。しかもそんな大声でしたら近所迷惑だぞー俺はお前にだけしか見えないんだし。」

「はあ!?なに言ってるのよ!」

「来たか・・・俺はしらねーぞ。」

「来たってなによ・・・妖怪でも来るの?」

「さあな。」

すると玄関のドアが開いた。

「ちょっと、沢田さん。煩^{わづら}いわよ？一人で怒鳴って・・・
こんど煩くしたら反省文書かせますからね！」

「ちょ、先生！コイツのこと見えないんですか！？？」

私は悪魔と名乗る奴に指を指した

「はい？何を言ってるんですか？沢田さんは靈感でもあるのかしら？
怖いわね・・・」

すると耳元であの悪魔が言ってきた

「ざまあみやがれー」

・・・コイツ！ムカツク！！！！

反省文はいやだし・・・、くそっ！

「何がざまあみやがれなのよ・・・！」
と小さい声で言ってみる

「・・・幽霊と話すのはいいですけど、くれぐれも他の生徒に幽
霊が手を出して

変な事になったら承知しませんからね」

では、といって部屋のドアが閉められた。

4話

「あんだねー・・・・・・・・」

「何？」

「ムカツク・・・！」

「大声でしたら反省文なんですよ？」

クスッと笑って言われた。

「うるさい・・・・・・・・！！」

「俺はしらねーよ、反省文書かされても」

「何よ・・・！あんだのせいでしょうか！！」

「静かにしてよー、うるさいんだけどー。」

「ムカツク・・・」

「黙ってくれない？」

そういつて私に近づいてくる。

「ちょっ、何よ・・・」

どンドン近づいてくる。

いつの間にか壁まで追い詰められていた。

冷や汗が出てくる。

顔が近づいてきた・・・キスされる・・・っ！

・・・・・・・・。

「キスすると思った？」

「なっ！」

みるみる自分の顔が赤くなっていくのが分った。
恥ずかしくなって両手で自分の顔を隠す。

「ふーん・・・可愛い所もあるんだあ」

「かつ、可愛くなんか・・・！！」

そのとき顔を上げたのか悪かったのか。
頬にチュッとキスをされてしまった。

「ちよつと・・・・・・・・・・！」
また顔が赤くなってくる。

する悪魔が、んー。といって何かを考えている

「そうだ、お前・・・・晴香って言うんだったよな。俺のカノジヨ
的なモンになってくれねえか？」

「・・・・はあ？」

一瞬思考が停止してしまった。

「だから、カノジヨになつて？」

「何で・・・・」

「んー、俺さ、ちよつとやっかいな奴に絡まれててさあ。彼女とか
居るとすげえ楽なんだけど」

「何であんたの彼女にならなきゃいけないのよ。」

「あ、それと俺は岬みさきだから。」

「・・・・悪魔にもちゃんと名前あるんだ。日本人みたいな名前だし・
・もっと意味不明な外国人みたいな名前かと思ったよ」

「一応、俺も日本人だから。・・・・じゃあ、よろしく晴香」

「は？よろしくって何？」

「ん？俺の彼女になったから。あ、俺の事岬って呼べよ」

「はあ！？何で・・・・・・・・・・！？?？」

急に手で口を塞がれた

5話

「っ!???」

「反省文書きたいのか?」

あ!とひらめいたように岬・・とかいう悪魔は言葉を続ける

「俺のこと名前で呼ばなかったら・・・・・どうなるか分ってる?」

「んんっつ!!!!」

「反省文書かされるよー?」

「・・・っ」

「本当人間って面白いね。悪魔とは大違い」
ボソリといったので私には聞こえず。。。

悪魔の手を自分の手で退けて私は言う。

「あの・・・さ、もう寝たいんだけど。寝させてくれない?」
「・・・分った。」

「じゃ、お休み」

「お、挨拶はしてくれるんだ」

「う、うるさいっ!!」

私は照れ隠しのように布団を思いつきり頭までかぶせた

6話（前書き）

いや、お久しぶりです、NL久しぶりです。
えっと、なんかごめんなさいです

6話

目覚まし時計が耳元でうるさく鳴っている。

「……るさいなあ……」

目覚まし時計を止める。

「……眠い。」

目覚ましを止めたので、何にも邪魔されずに寝れる、って思っていたのに……。

「おーい、起きろー……。お前、遅刻すっぞ」

「……うるさ……。……！！！！な、何でここにいるのよ！！」

「耳元で騒ぐなよ。るっせーなあ……」

「あ、あ、あああんたがここにいるからでしょ！！」

そもそも何で私のベッドでこいつが寝てるのか分からない

「あー……。寝顔、可愛かったぞ？」

「か、かわっ……。！！」

「……。……。タコ」

た、タコ????

「顔真っ赤……。笑」

「うるさいうるさい！！！！からかうんじゃないわよ！！どっかいって！！！！」

悪魔……。もとい、岬を相手にしているのがバカバカしくなって私はキッチンへ行ってご飯を作る。

ご飯、といっても簡単なものでトーストに目玉焼きとベーコンをつけたただけ。

まあ、よく見る朝ごはんなわけで。

「……。おい、俺の分ねえのかよ」

・・・は？

何言ってるのコイツ、ふざけんじゃないわよ

そう思ってるうちに岬が私のお皿に乗っているベーコン1枚を食べた

「あー！！！それ私のベーコン！！！！とらないでよ！！！！弁償して！！！」

「はあ？食っちゃったもん弁償とかできねえにきまってんだろ？」

「ウザイ・・・。今すぐ出て行って！！ついでに着替えるから！！！」

「・・・お前の裸なんて見たって何の得もしねえんだけど・・・」

「うるさいわね！！レディに失礼じゃない！！！」

「は？レディ？？どこにいるんだよ？」

「・・・うざい、うざいうざいうざいうざい！！！！！」

「出て行って！！！」

「はあ・・・、何で朝からこんなことに・・・」

「お前、着替えんの遅えんだけど」

「え・・・」

私の後ろから聞こえる声は・・・岬。

「な、な、なんでいるのよ！！！」

下着はつけてるからましだけど、一步遅かったら・・・！！

恥ずかしくて顔が真っ赤になっているのが分かる。

「ふーん・・・スタイルはいいんだな」

「~~~~~！！！！！」

あああああああああ！！！！！！！！！！

なんで、何でこんな奴になんか私の体見られなきゃいけないのよ！！

ふざけんじゃないわよ！！！！

もう、どうでもいい！！

早く着替えてここを出たい！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4661s/>

私のGuardian

2011年11月2日16時16分発行